

日精協支部長就任のご挨拶

社会医療法人 ましき会 益城病院理事長 犬 飼 邦 明
公益社団法人熊本県精神科協会副会長

この6月、公益社団法人熊本県精神科協会の役員改選が行われ、会長、副会長はじめこれまで熊精協を支えてきた重鎮の皆様が勇退されました。世代交代は世のならいとはいえ役員半数が替わるという未曾有の事態にあたり、はからずも日精協熊本県支部長のご指名をお引き受けすることになりました。理事職に就いて10年にもならない新参加者がいつの間にか後ろから数える方が早い位置に立たされていることに気づき歳月の移ろいをつくづくかみしめています。益城病院の院長になったのが平成3年6月ですから22年前になります。当時40歳になったばかりの青年が、はや初老期を過ぎようとしています。実は益城病院先代院長の犬飼勝通が言い遺した言葉に「役員だけは引き受けるな」というものがありました。言いつけを守り医師会や同窓会を含め一切の役員になることを拒んでいました。ちょうど10年前のことですが、熊精協ではいち早く独自の審査基準による「熊精協ピアレビュー」を始めており、酒井保之先生、藤本敏雄先生はじめ各病院から選ばれたコメディカルスタッフによる相互評価が行われていました。その委員に抜擢されたのが熊精協とのつながりの第一歩でした。若造がいくつかの先輩病院の機能評価に回ることに今から思えば身の程知らずもよいとこでした。

もともとワサモン（熊本弁で新し物好き）なところがあり、私の病院では当時既に精神科としては全国で18番目となる日本医療機能評価機構の認定を受けていました。それが三村孝一先生の目にとまり、「日本医療機能評価機構のサーベイヤーになりなさい」。この鶴の一声を聞いた頃はまだ先代の「戒めへの背き」が始まっていることに気付いていませんでした。同じ頃、自院の電子カルテ化に取り組んでいた私に「日精協病院経営管理委員会のレセプトIT化部会に入れ」と命じられました。2006年のことでそれが日精協への登竜門となりました。三村先生からは他にも「認知症サポート医になれ」といわれお引き受けしたのが最後だったのでしょうか。今思えば、精神科医療の将来に危機感を抱き、民間精神科病院の生き残りの方策を真剣に考えておられたのは三村先生だったのではなかったのでしょうか。

一方、私を投げ網のようにたぐり寄せたのが藤本敏雄先生でした。いろいろご馳走にもなっていた手前断るわけにもいかず、「熊精協恒例の球磨川河川敷ソフトボール大会に代わるイベントを企画しろ」と命じられ、「くませいフェスタ」初代実行委員長になりました。その要求はとどまるところを知らず、いつの間にか熊精協理事に選任され、共同組合の理事にも祭り上げられ、古賀靖人先生亡き後、地域医療担当理事

として二次救急輪番体制や精神科救急情報センター設立へと流れ、さらに日精協では看護コメディカル委員会、政策委員会と回され、藤本先生の周到な計画通り、昨年度から日精協理事、そしてこの度、とうとう日精協熊本県支部長を引き継ぐことになりました。熊本人というもの先輩から命じられると「No」といえないところがあるのは私だけではありますまい。ただ診療がどうしてもおろそかになり、自院にいたことが減った今になって「戒め」を守るべきだったかなと悔やんでいる自分もいます。

中央に顔を出すようになると高度の政策課題が草案の段階から耳に入ってきます。日精協政策委員会で最初に取り組んだのは「障害者権利条約」批准に伴う国内法整備案件でした。これはその後「障害者差別禁止法」「障害者虐待防止法」さらには現在の「精神保健福祉法」の保護者制度見直し、全国で5番目といわれる熊本県の「障害のある人もない人も共に生きる熊本づくり条例」へとつながる原点でした。医療と福祉、疾病と障害の混同からくるいろんなバイアスや、政局の流れにも敏感になり、医療観察法や自立支援法の成立過程や未成熟な点にも自然と目が行くようになりました。次に取り組んだのが「日精協将来ビジョン策定部会」で千葉 潜常務理事の指導のもと、急性期・救急部門の取りまとめを行いました。その時は熊精協の精神科二次救急輪番体制との関わりが大いに役立ちました。熊精協政治連盟や4病協の勉強会ではこれらをテーマに県議や地元選出国會議員の先生にも話を聞いて戴く機会や、ペーパーにしたり学会やシンポジウムで話したりする機会も得ました。

いろんな会議に参加して感じたことは、中央省庁の課長級の実務者と丁々発止渡り合うには、発想に富み、行動力があり、柔軟性のある若い委員、役員でなければならぬというものでした。今回の熊精協役員改選で新たに理事となられた先生は新進気鋭、先進医療を担う方々が多く、理事平均年齢54歳とかなり若返ったことは大いに歓迎すべきことであります。彼らは現役の精神科医として、そして若手院長、若手経営者として辣腕をふるっている先生方ばかりです。彼らの寝食を忘れた診療姿勢は、病院職員のみならず患者家族の信頼を得るに十分であり、また行政に対しても一家言をもつ逸材であると信じております。それだけに、時には足許を見ることも忘れてはなりません。熊精協会員全てが自院と同じようにできるわけではありませんし、栄枯盛衰いろんな段階の病院があるのも事実です。二次救急輪番体制発足の時の熊精協会長だった松本郁朗先生は「熊精協みんなで取り組む」姿勢を貫き通されました。昨年精神科救急情報センター設立にあたって、宮川洗平前会長の「オール熊精協でやろう」という言葉が強く心に残っています。この精神はこれからも熊精協の風土として大切にしていきたいと思えます。日精協熊本県支部長として荒木邦生副支部長と共に、相澤明憲熊精協会長を支え、後に続く理事の先生方の舵取りをすることが私の使命と考えています。どうかよろしくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。